
書 評

「やめられない ギャンブル地獄からの生還」

帯木蓬生 著 (集英社)

副田秀二

ソエダ精神保健サービス

病的ギャンプリング (ギャンブル依存) の治療に精神科医として積極的に関わり続ける著者が書き下ろした本書は、文字通り、ギャンブル地獄におちた人々が生還するための手引書である。本書は、著者によるギャンブル依存に関する前著「ギャンブル依存とたたかう」と同様に読みやすく、全十五章のどこから読んでもすぐに引きこまれる。

第一章は症例集で、ギャンブル地獄であえぐ人たちの様子が描かれている。全6症例のうち1例目と2例目は意外にも女性患者で、兄や知人に連れられてパチンコ店に入ることから端を発し、次第に嘘と借金が重なり、離婚問題に発展して初診に至る。周囲の人々の動揺、落胆、怒りにあっても、なおギャンブルにのめりこんでいく病理の深さに息をのむ。3例目以降の男性患者たちも、ギャンブルでつくった借金はギャンブルで返さなくては、自分のギャンブルはどこかで大逆転できる、などと思い込み、深みへと追いやられていく。

第二章は診断で、自分で診断する方法も記されている。ここではWHOの国際疾病分類の基になっている米国の精神疾患分類 (DSM-IV-TR) などの診断項目のほかに、著者自身が邦訳して二十年近く使用しているというサウス・オークス・ギャンプリング・スクリーン (SOGS) が呈示されている。SOGSは一般人口の中から病的ギャンブラーを抽出するために考案されたもので、点数によって「病的ギャンプリング」だけでなく、将来病的ギャンプリングになる可能性の高い「問題ギャンプリング」も抽出する。

第三章から第十章まではギャンブル地獄をより深く理解するための解説で、ギャンブル地獄の二大症状は借金と嘘 (第三章)、ギャンブル地獄で「意志」はない (第五章)、ギャンブル地獄では家族も無力 (第十章) と、各章のタイトルを読むだけでもギャンブル依存の本質が

垣間見える。第八章ではギャンブル地獄で起こる犯罪について、背後にギャンブル依存が隠れていた事件が列挙される。誰もが知る事件に、ギャンブル依存による借金が絡んでいる事実が驚かされる。第九章はギャンブル地獄の女性たちとされ、我が国の女性がこの病気に無縁ではなく、恋人や友人の手ほどきがある例が多いこと、寂しさや現実逃避、ストレスや抑うつ気分の紛らわしききっかけになることなど、男性患者との相違が解説されている。

そして第十一章から第十四章にかけて治療の手順が示される。「自助グループこそ地獄に垂れた蜘蛛の糸」と表現されるように、週1回以上の自助グループへの参加と月1回の通院がギャンブル地獄からの生還の道を切り開くとされる。代表的な自助グループであるギャンブラーズ・アノニマス (GA) のメンバーになるためにお金はいらず、必要なことはギャンブルをやめたいという「願い」のみだという。GAがミーティングのテキストに使う十二のステップと、それらに沿った「話し合おう」の項目の抜粋部分を読むと、自助グループによる回復が納得できる気がしてくる。自助グループに参加し傍聴している著者は、回復する理由は自助グループの最終目標が人間性を取り戻すことにあるからだという。その人間性として、思いやり、寛容、正直、謙虚の四つを挙げ、通常の社会のなかに、こうした人間性回復の場などひとつも用意されていないことを痛感するという。

最後の第十五章は予防について、日本のギャンブル依存に関する施策の乏しさに言及している。私たちひとりひとりがヒト社会のギャンブル行動を学び、どういふ施策が必要なのか熟考し行動するしかないという。

ギャンブル依存は進行性で自然治癒がない。ギャンブル依存には説教も誓約書も役に立たず、治療でしか元の生活に戻ることはできないという。本書は、ギャンブル依存の恐怖を伝えるだけでなく、診断、治療といった回復への道筋を明示している点が実践的である。さらに、治療が始まって家族ができることも具体的に記されている。そのため、本書はギャンブル依存に陥った本人や家族に紹介するのにも適している。

ギャンブル依存は国内推定200万人と言われており、産業保健スタッフがギャンブル依存の従業員に遭遇する場面は充分にあり得る。本書はその際の明快な指南書である。